

吉蔵『法華論疏』における佛身の理解について

藤 野 泰 二

一 はじめに

本稿は、嘉祥大師吉蔵（五四九—六二三）による世親『法華論』への注釈書である『法華論疏』における佛身論について考察したものである。

従来の諸研究において『法華論疏』はあまり触れられていないが、吉蔵の佛身論において『法華論』と同じく世親の著作である『撰大乘論』世親釈からの影響は強く、また、吉蔵が『法華論』を重要視していたということもあり、着目すべき文献であると考えられる。また、菅野博士が明らかにしたように、⁽²⁾『法華論疏』は『法華統略』よりも後に作成されたものであり、吉蔵の後期思想における佛身論を窺うことができる。

奥野光賢博士は、吉蔵にとって『法華論』とは「『法華經』にも佛身の常住と佛性を明かしていることを論証する際、重要な指針として依拠したものの一つ」であり、「その発見と

依用は南地にあつては吉蔵を嚆矢とする⁽³⁾」と述べている。また、吉蔵が「『法華論』を依用した目的は、前代の法華学の權威、光宅寺法雲が五時教判に基づき『涅槃經』は「佛身の常住」と「佛性」を明かしているが『法華經』はいまだそれを明かしていないので価値的に劣るとした点に強い不満を示し、『法華經』も『涅槃經』同様「佛身の常住」と「佛性」を明かしていることの論拠にした点に求められる⁽⁴⁾」とも述べている。

二 『法華論疏』における佛身論的理解

吉蔵の『法華論疏』における三身説についての説明を見ていきたい。まず、法身に関する説明から見ていくこととする。吉蔵は法身の異名として、

初めに法界・法性・法身を明かす。皆な是れ異名なり。（大正四〇・八二六上）

と述べ、法界・法性を挙げている⁽⁵⁾。また、

此の四（「實・虚・如・異」）は並びに是れ名言の及ぶ所なるが故に是れ無常なり。法身は名言を絶す。所以に常住なり。（大正四〇・八二一中）

と述べ、法身とは言説の及ぶところのものではないという。また、

「佛性法身更無差別」とは、亦たは佛性と名づけ亦たは法身と名づく。佛性と法身とに更に差別無し。（大正四〇・八一上）

と述べ、法身と佛性との差別はないとしている。また、次のようにも述べている。

一には、法身佛は一切處に遍ねきこと海の大なるが如し。故に『普賢觀』に云わく、「毘盧舍那は一切處なり」と。二には、深きこと海の如し。謂わく、七辨は説く能わず、五眼は其の照するを忘す。故に深と謂うなり。三には、一味なること海の如し。平等法身一身は味の如し。四には、法身は一切の功德を具すること、海の衆珍を備うるが如し。（大正四〇・七八五中—下）

法身は大海のようにあまねく一切處に現れているのだという。この法身の遍満ということについては、次のようにも述べている。

又、理に於いて未だ始めより二ならず。故に衆生界を離れず。縁に於いて未だ始めより一ならず。故に衆生界に即せざるなり。亦た是れ六道は常に法身なるが故に法身を離れず。縁に於いて六道と成るが故に即せず。（大正四〇・八二一中）

ここでは、六道はつねに法身なのであり、衆生界を超越し

吉藏『法華論疏』における佛身理解について（藤野）

たものではないとし、また、縁によつて一なるものでもなく、不一不異なるものとしてあるとしている。

また、多宝如来との関わりとして、次のように述べている。

釋する中、「諸佛法身自在身力」とは、此れ多寶は十方世界に於いて涌現し及び發聲をして佛を歎ずるの事を釋す。法身は一切處に遍するを以ての故に能く一切處に於いて此の功德有り。（大正四〇・八二三上）

多宝如来が十方世界に涌現するという功德があるのは、法身が遍満しているからであるという。

また、吉藏は多宝如来が現れるということは、世間と涅槃とが異ならない（平等）ということを表していると述べている。

・多寶如来は常に十方世界の中に在して入涅槃と稱するを以ての故に、世間涅槃平等なることを知りぬ。（大正四〇・八一七中）
 ・今、多寶の入涅槃を明かすとは、常に世間に在り。故に知りぬ、世間涅槃平等なることを。世間涅槃は既に平等なるが故に知りぬ、自身他身も亦た平等なることを。自身は即ち多寶の身、他身は十方佛釋迦佛の身を謂う。（大正四〇・八一七下）
 ・又、多寶は涅槃に入ると雖も常に世間に示現するは、此れ世間涅槃平等と爲すを以て、即ち釋迦等の十方佛に類するに、世間に在りと雖も常に是れ涅槃にして、亦た是れ世間涅槃平等なり。（同前）

又、多寶佛は常に世間に在して入涅槃と稱す。釋迦等の十方の佛は世間に在りと雖も亦た是れ涅槃なり。故に知りぬ、多寶と釋迦とは自他異ならざることを。（同前）

吉蔵『法華論疏』における佛身の理解について（藤野）

二二二

般涅槃している多宝如来は般涅槃しつつ世間に姿を示現しているのであり、それは世間と涅槃とに差異がないということなのであり、また、逆に釈尊等の十方佛は世間にありつつも般涅槃しているのであり、多宝如来と同様に世間と涅槃との平等を示しているとする。

ここで多宝如来に対する吉蔵の説明を見てみると、次のように述べている。

是の故に釋して云わく、多寶は是れ法身なり。十方の諸佛も同一眞如法身なり。故に多寶の法身に一切の佛の法身を攝す。所以に唯だ一のみなり。

問う、多寶は是れ法身と爲すや、法身を表すと爲すや。

答う、光宅等の師に依るに乃ち言わく、多寶は是れ化身、家舍利は三身の所攝に非ず。亦た佛寶に屬し攝せらるることを得。

今、四種の意を明かす。

一には、迹に據りて是れ佛舍利と言うが故に、八義の中の初義に「塔とは如来の舍利住持することを示現するが故に」と云う。

二には、多寶を以て法身を表す。叡の云うが如し、「多寶は其の不滅を明かす。多寶の身に寄せて法身の不滅を顯わすなり」と。

三には、天親は前に三平等を釋する中に、多寶の身は即ち是れ法身なることを明かす。多寶の此の身は即ち是れ入涅槃なるを以てなり。此れは是れ三德涅槃に入る。三德涅槃は即ち是れ法身なり。又、八義の中の第三義に、多寶如来の身は一體に一切の諸佛の法身を攝するが故に即ち是れ法身なることを知る。

四には、多寶は涅槃に入ると雖も常に世間に在り。故に世間涅槃は不二なり。即ち世間に非ず涅槃に非ず、言亡慮絶するなり。故

に『中論』に云わく、「生死の實際及び涅槃實際は、是の如く二實際は豪釐の差別無し」と。（大正四〇・八二三下―八二三上）

ここで吉蔵は「多寶は是れ法身なり」と述べているが、このときの「法身」とは、初めに引用した法界・法性としての法身とは異なる。すでに拙稿にて指摘したように、吉蔵が「法身」の語を使用するとき、それは法身そのものを指す場合と、法身相であるところの内応身を指す場合とがある。⁽⁶⁾この引用中においては、「多寶は法身であるのか、それとも法身を表しているのか」との質問があり、吉蔵は四種の答えを出しているが、その第二において、「多寶表法身」と述べて、多宝如来は法身を表したものであるとの見解を述べている。

吉蔵は、多宝如来・釈尊・分身佛について、次のように説明している。

問う、多寶・釋迦・分身の佛は此の三は是れ何の佛なるや。

答う、文に依りて判ずれば、論主の云わく、「多寶は是れ法身、釋迦を報身佛と爲し、分身を化身佛と爲すなり」と。

問う、前に隱時を明かして法身と爲す。多寶は豈に是れ隱時ならんや。

答う、論解に二種の法身あり。一には隱時を法身と名づく。此れ多寶に非ざるなり。二には顯時を法身と名づく。即ち多寶なり。

問う、若し爾らば報佛と何の異なるや。

答う、體は一にして義は殊なり。酬因の義邊、之れを目標けて報と爲す。衆法の所依正法を身と爲す。故に法身と名づくるなり。

（大正四〇・八二三中）

また、ここでは、論主である世親の見解として、多宝如来を法身、釈尊を報身、分身佛を化身とする説を挙げている。しかし、隠時と顯時の二種の法身があると述べ、隠時の法身は多宝如来が意味するところの法身ではなく、顯時の法身が多宝如来の意味するところの法身であると述べている。これは如如と相応した佛身となるため、次の問答では「それならば多宝如来は報身とどう異なるのか」との質問がある。吉蔵はそれに対しては「酬因の義が報なのであり、衆法の所依正法を身としているので法身というのである」と述べている。これに関連した記述が、次のようにある。

法佛の菩提の體を出だすこと經論不同なり。餘經に云わく、「隠れたるを如来藏と名づけ、顯われたるを法身と名づく」と。此の論は正しく如来藏を以て法身と爲す。顯は即ち報身と名づく。

(大正四〇・八二〇下―八二一上)

ここでは吉蔵は『勝鬘經』の一節を引いているが、如来藏(隠)を法身であると言い、顯は報身であると述べるのである。ちなみに、『法華論』において三身説は法身・報身・応(化身)の三身であるが、『撰大乘論』世親釈では、法身・応身・化身の三身である。吉蔵は他の撰述書においては、『撰大乘論』世親釈の三身の語を採っている。よって、

・『攝論』に應身と云う、今報身を明かすは、眞如と相應するが故に應身と名づく。行因の所得、酬因の義邊、之れに自りて報

吉蔵『法華論疏』における佛身の理解について(藤野)

と爲す。義は相違せず。二論各々其の一を擧げて違すること無きなり。「得常涅槃證」とは、還りて是れ佛性顯現す。故に名づけて報と爲す。佛性は既に常なるが故に報身も常なり。報身は既に常なれば、前の化身は即ち是れ無常なることを顯わす。

(大正四〇・八二〇下)

・有る人の言わく、分身の佛は是れ應身佛なり、と。何を以てか之れを知るや。『攝論』及び『同性經』は並びに應身と言う。淨土の中に住して法を説きて菩薩を化す。今、分身は並びに淨土の中に在りて法を説く。當に知るべし、即ち是れ應身なることを。應身即ち報身なり。釋迦は穢土に在るが故に是れ化佛なりと今明かす。斯の釋を作す者も亦た然ることを得るなり。各々一義を取る。(大正四〇・八二三中)

と述べ、このように『撰大乘論』世親釈や『大乘同性經』における応身が『法華論』における報身と異なるものであることを述べている。ただ、次のように『撰大乘論』世親釈と多少の異なりがあるとも述べている。

また、『撰大乘論』世親釈との関連について、次のように述べている。

此れは『攝論』の三佛と小しく異なり。『攝論』には應化を分かちて二と爲す。今は應化を合して一と爲す。何を以て然りとすれば、『攝論』は應身と眞如とは相應することを明かす。即ち是れ此の論の「報身化身即是八相成道」なり。故に應化を分かちて二門と成す。今、此の中に自徳を明かして報身と爲し、化他の義を應化身と名づく。(大正四〇・八二〇下)

ここで吉蔵は、『撰大乘論』世親釈と多少の異なりがある

吉蔵『法華論疏』における佛身の理解について（藤野）

二二四

ことを指摘している。『撰大乘論』世親釈は法身・応身・化身の三身なので、応化を二つとするとという。これに対し、『法華論』では、法身・報身・応化身の三身であるという。菩提留支訳『法華論』では法身・報身・応身であるが、勒那摩提訳では応身は「応化身」となっており、吉蔵の『法華論疏』における『法華論』の文章は基本的に菩提留支訳を使用しているとされるが、この三身については勒那摩提訳の「応化身」が使われている。そのため、ここで応化を一つとすると述べているのである。

また、この引用では、報身は自徳を備えている佛身であるとあり、多宝如来は報身であるのなら、やはり他の吉蔵の法華經疏と同じく多宝如来は吉蔵の佛身論という内応身に相当していることがわかる。

また、吉蔵は、『法華經』見宝塔品における二佛並坐の説明として、「三佛同坐」という解釈をしている。

問う、唯だ多寶と釋迦とは同じく一塔に坐し、分身は同じく塔に坐せず。云何んぞ三佛同じく一大事と言うや。

答う、即ち釋迦は自ら三佛を具す。伽耶の成佛を示現するは化身を謂うなり。久しく已に成佛するは、行因の所得なれば、報身佛を謂うなり。眞有るが故に即ち法身有り。故に釋迦は三身を具す。即ち是れ三佛同坐して共に一大事を成ずるなり。

問う、乃ち釋迦は三身を具することを知らば、文の中に但だ釋迦と多寶と同坐すと云う、此れは是れ二佛なり。云何んぞ三佛共に

大事を作すと言うや。

答う、分身は乃ち同坐せざるも、而して諸佛の意は同じく大事を成ずればなり。（大正四〇・八二三上）

この「三佛同坐」という表現は『法華論疏』のみに見られるものである。これは世親の『法華論』の「同一塔坐者示現化佛法佛報佛等皆爲成重大事故」（大正四〇・八二三上）という文に対する注釈であり、この「同一塔坐」という語を世親の言葉に対して注釈するために、このような表現を用いたと考えられる。

三 小結

以上見てきたところの、『法華論疏』における吉蔵の佛身論的理解について、まとめるならば、以下のようになる。

① 法身の異名として、法界・法性が挙げられる。また、佛性も差別なしと言われる。

② 法身は言説を絶したものである。

③ 多宝如来（般涅槃しつつ現世にいる）および釈尊等の十方佛（現世にいつつ般涅槃している）は、世間涅槃平等を表す。

④ 多宝如来は法身であると述べられるが、「表法身」と言われるように、法身を表したものであり、法身そのものとは異なる。

⑤多宝如来は顕時の法身であり、所依正法を身とする佛身である。

⑥それは吉蔵の佛身論でいうところの内応身に相当するため、他の法華經疏における佛身論と異なるものではない。

1 拙稿「吉蔵と『撰大乘論』」(『宗教研究』第八十三巻第四輯、二〇一〇年)を参照。

2 菅野博史「吉蔵撰『法華統略』と『法華論疏』との撰述順序について」(『印度学佛教学研究』第二十八巻第一号、一九七九年)を参照。

3 奥野光賢『佛性思想の展開——吉蔵を中心とした『法華論』受容史——』(大蔵出版、二〇〇二年)三十八頁を参照。

4 同前七—八頁を参照。

5 吉蔵は『中観論疏』巻第九末(大正四二・一四三下)および巻第十末(大正四二・一六〇上)において、法身の異名として、性空、寂滅、実相、真如、法性、實際、法界、涅槃等を挙げている。

6 拙稿「吉蔵の法華經疏における佛身論——二佛並坐の解釈を中心として——」(『仲澤浩祐博士古稀記念論文集インド佛教史佛教学論叢』山喜房佛書林、二〇一一年)を参照。

7 藤本晃「中国佛教に於ける佛身論の変遷」(『龍谷大学大学院研究紀要人文科学』第九集、一九八八年)を参照。八十七頁に「吉蔵の見た『撰大乘論』は法、応、化身を示す一方、主として自性、受用、変化身を用いる。これを釈した『撰大乘論』は、自性、受用、変化身を殆ど法、応、化身に換えてい

る。吉蔵は『撰論』を世親造とし、また自性、受用、変化の三身を考察していないので釈本を取り上げたと思われる」との指摘がある。

8 奥野光賢『佛性思想の展開——吉蔵を中心とした『法華論』受容史——』(大蔵出版、二〇〇二年)を参照。七頁に「『法華論疏』は基本的には菩提留支(流支)訳『法華論』を注釈したものであるが、引用されている本文を精査していると、勒那摩提訳に近いものもあり、また菩提留支訳・勒那摩提訳いずれにも合致しないものがあることが報告されている」との指摘がある。

9 藤井教公・池邊宏昭「世親『法華論』訳注(3)」(『北海道大学文学研究科紀要』第百十一号、二〇〇三年)の五十三頁・注記八十九には「吉蔵所引の文句には「非化佛」の語を欠いている」との指摘がある。

〈付記〉吉蔵『法華論疏』の解説に際しては日蓮宗本山玉澤妙法華寺所蔵の正徳四年版を参照した。記して感謝申し上げます。

〈キーワード〉吉蔵、『法華論疏』、佛身論、法身

(立正大学非常勤講師)